

ル。ホルターージュ

国境の町から火の国へ

見知らぬ人 見知らぬ町

永井 龍二 著 太平出版社 刊



ルポルターージュ

国境の町から火の国へ

見知らぬ人 見知らぬ町

永井 龍二 著 太平出版社 刊



筆者紹介

永井 萌二 むすひ 1920年東京に生まれる。1944年早稲田大学文学部卒業。敗戦後、46年朝日新聞社入社。以後、『文芸朝日』副編集長、「朝日新聞」編集委員を歴任。日本ペンクラブ会員。現在、聖徳学園短大で児童文学を講義している。おもな著書に『キムチの匂う街』『春風のなかの子ども』（太平出版社刊）、『雑草の歌』『焼け跡は遠くなったか』などのほか、児童書に『ささふね船長』『サンアンツンの孤児』などがある。

ルポルタージュ 見知らぬ人 見知らぬ町

1980年12月25日 第1刷発行

著 者 永井 萌二

発行者 東京都新宿区弁天町107 崔 容 徳

印刷者 東京都文京区後楽 2-11-2 道野整版所

発行所 東京都新宿区弁天町 1 0 7 番地 石 嶋 ビ ル

株式会社 太 平 出 版 社 ©

電話 03-204-1351(代表) 振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします 定価はカバーに表示してあります

見知らぬ人

ルポルタージュ

見知らぬ町

国境の町から
火の国へ

永井

萌二

目次

I はじめに

15

1 人生をみつめる旅——まえがきにかえて

16

もうひとつの旅 16 越前和紙のふるさと 16 暗い思い出にもあたたかさ 17 松本清張氏と信州の旅 19 綾子さんの夕べの祈り 21

II

23

2 につぼん各駅停車——鈍行列車で五四〇駅の旅

25

最北端の町から 25 ウィスキーなめなめ世間話 26 鈍行客の話に耳かたむける 28 敗戦直後さながらの行商車両 30 連絡船上で 32 どの座席にもリノゴが 33 土地の人との心のふれあい 35 墨絵のような裏日本の風土 36 温泉がえりの婦人会 37 大阪発門司行鈍行列車 39 ビールがふさわしい山陽道 40 九州を南下 41 各駅停車の旅の終わり 43

3 冬から春への本州縦断——東経一三七度線を南へ

45

名も冷やかな氷見の町 45 暗く寝しずまった町 46 万葉集に歌われた海 47 万葉の遺跡も多い地方 49 氷見線から高山線へ 50 飛騨は寒暖の境 52 碧南のイメージと実景 54 産業都市の夢をおいかける 56 詩のあるフィナーレ 57

4	穴 道 湖——水郷の城下町を歩く……………	60
---	-----------------------	----

八雲立つ国⁶⁰ 雨にぬれる松江大橋⁶¹ 古い湖の新鮮な魅力⁶² すばらしい暮色の風情⁶⁴

5	津 和 野——四キロ四方の小城下町……………	67
---	------------------------	----

方四キロの小城下町⁶⁷ 歴史がつめこまれた町⁶⁸ 津和野の人十二傑⁶⁹ 町をでて活躍した人びと⁷¹ ひとり歩きがいい津和野⁷² コイ群るる町の人びと⁷⁴

6	四国巡礼同行記——生と死を経めぐるお遍路さん……………	75
---	-----------------------------	----

札所を歩く遍路のかげ⁷⁵ 一夜の縁、それぞれの業⁷⁷ 遍路同士の語りあい⁷⁹ すぎさった苦難の歳月⁸¹

7	愛のノート『風』をまちわびる——青春の女流歌人たち……………	83
---	--------------------------------	----

歌集『風』はいまどこに⁸³ すこやかに夫に添はん⁸⁴ 六枚の名刺をたよりの旅⁸⁵ 『風』の最初の提案者⁸⁷ 青春をむなくおくる⁹⁰ 短歌が唯一⁹¹

III	……………	95
-----	-------	----

8	民族音楽を愛する人たち——アルメニアの思い出……………	97
---	-----------------------------	----

二〇歳のおばあさん⁹⁷ 苦しい時代の思い出⁹⁹ 思いがけない心のふれあい¹⁰¹ だけど、心はやらないぞ¹⁰² 別れのとき¹⁰⁴

9	あま色の髪の女——ブルガリア民話の旅……………	105
---	-------------------------	-----

バルカン半島の秋 105 ベートルのとんち話 107 金持の百姓と貧乏な百姓 109
まの時代がいちばんいい 112 黒海の光を遊びながら 114

10 トーボリの木の下で——ソヴェト民話の旅 118

中央アジアを西へとぶ 118 タタールのむかし話 120 アルマ・アタの町を歩く 122
心のなかのふるさと 126

11 七〇年のロシア——民族の心の旅 129

ナホトカからモスクワまで 129 民衆たちの顔と暮らし 130 ロシア人を裸にする
と 132 ソヴェト国籍の日本人たち 135 かなしみこもる歌声 137 岡田嘉子の「女
の一生」 139

IV 141

12 傷つき荒れた「筑豊炭田」——豊州炭鉱事故から一か月 143

どろとボタでつまった坑道 143 廃屋から白いガス 144 会社側の無言の圧力 145
孤児たちのゆく道 147

13 さいはての「飢餓半島」——でかせぎの漁村をたずねて 148

さいはてムードだど 148 ポシャッタ夢の大企業 149 専業漁師は皆無にちか
い 151 地元に企業さえあれば 152 生まれかわろうとする声 154

14 父ちゃんのいる正月——でかせぎから解放された一家の哀歓 157

じぶんの家がなにより 157 エノキダケの栽培に成功 158 楽しみは手紙を書くとき

き 161 いっしょならつらくない 163 希望に胸をふくらませ 164

15 生きのこった「青い目の人形」——アメリカ人形をまもったある反戦…………… 167

生きのこった青い目の人形 167 傷痕をきざみつけた人形 170 人形をたすけた人 171

16 猪飼野の「しょっぱい歴史」——在日朝鮮人のさまざまな傷ぐち…………… 173

「しょっぱい歴史」の町 173 永住権と民族の誇り 176 なんだ、朝鮮人か 178 子どもにだけはいいい教育を 179 目を輝かせるわかものたち 182

V…………… 185

17 反戦詩をつづって六〇年——樋口配天翁の悲願…………… 187

つきそいのおじいさん 187 反戦叙事詩 188 苦しい生活にもたえて 192

18 「ぼくはこの診療所を離れない」——津軽の無医村にきた游紹陳先生…………… 195

無医村の外国人医師 195 みるにみかねて 197 ぼくは、この村で死ぬ 199

19 ガー公先生と教え子たち——名物教師 小野美哉さん…………… 201

天衣無縫の数学教師 201 六中の草創期から二〇年間 202 楽しみは教え子の来

訪 205

20 かたすみからの発言——深尾実さんの下町情報…………… 207

詩情あふれる文章 207 下町情報 208 小説家を夢みた日 209

21	日本の喜劇王が死んだ日——エノケンの泣き笑い人生	211
----	--------------------------	-----

	喜劇の王様 211	しわだらけの傷心の顔 212	さみしい楽天家 213
--	-----------	----------------	-------------

22	蝶々が語るわたしたちの「夫婦善哉」——南都雄二逝く	215
----	---------------------------	-----

	雄さんの死 215	女房やったら、看病できたのに 216	上方人情あふれる名司会 217
--	-----------	--------------------	-----------------

23	処女作を書いた思い出の土蔵——水上勉さんの涙	219
----	------------------------	-----

	白幡の母さん 219	水上さん がんばれ 220	苦渋にみちた生活 222	内田家のやさ
--	------------	---------------	--------------	--------

	しいひとびと 223
--	------------

VI		225
----	--	-----

24	「韓国戒厳令」に直言する——金大中氏の悲痛な叫び	227
----	--------------------------	-----

	韓国の民主主義の死滅 227	権力欲から戒厳令を 228	受難がまちうけている 229
--	----------------	---------------	----------------

25	わたしは朴大統領退陣を直言する——金泳三氏インタヴュー	231
----	-----------------------------	-----

	民主回復をまつ国民の期待 231	おいつめられた朴政権 232	帰国したらあぶな
--	------------------	----------------	----------

	い 235
--	-------

VII	おわりに	239
-----	------	-----

26	わたしが歩いた時代——あとがきにかえて	240
----	---------------------	-----

	童話の眼 240	かけだし記者の時代 243
--	----------	---------------

I は じ め に

1974年7月 『週刊朝日』の連載小説「天北原野」の取材で北海道サロベツ原野をたずねたとき 左から生沢朗さん、三浦綾子さん、著者



1 人生をみつめる旅——まえがきにかえて

もうひとつの旅

三十余年間の記者生活で、わたしはかぞえきれないほど、取材の旅をかさねてきた。そして、そこで出会った人びとから教えられたことが多い。

日本の頂点をきわめた人も、市井のかたすみで、こつこつ一つの仕事にじぶんの誇りをもって生きている人も、みんなすばらしい人生観をもっていた。そうした人たちとの出会いもまた、わたしじしんのもうひとつの旅だった。

ことに、作家のかたがたと、連載小説のための取材旅行をともしたことも、忘れられない。小説の舞台をいっしょに歩きながら、雑談のはしはしにキラリと光る人生観に感動したり、なにげない話のなかに、逆境からはいあがってきた人のあたたかな人間性にふれて感銘をうけたものであった。

六〇年代のおわりごろ、わたしは何回となく、作家の水上勉さん、画家の朝倉摂さんとごいっしょに、福井県の武生市に近い、今立郡今立町の越前和紙のふるさとをたずねた。

『週刊朝日』に水上さんが、くみという薄幸な紙漉き女を主人公にした小説「弥陀の舞」を連載することになって、その取材旅行に同行したのである。

水上さんの兵隊時代の戦友で中條栄一さんというかたが、この町で紙業を営んでいる。その中條さんや、手漉き紙の人間国宝である岩野市兵衛翁などが、深い雪にうまった味真野^{あじまの}とよぶ一帯の集落を案内してくださった。

コウゾのアクでよごれた水がぬめぬめと流れる川小屋で、水っぱなをすすりながら、おばさんたちが、コウゾのちりをとっていた。その腰に湯タンポが一つ一つくくりつけられていた。

「紙漉き女は、冷えきった体をぬくめてもらうために、男の腕に抱かれるんや」。

「手漉き紙には、女の肌のぬくもりがある」。

雪道に立って、水上さんは新しい作品の構想をねりながら、つぶやいたものである。

そのボンともらず、みじかいことばのなかにも、草ぶかい辺土での人間の地道な営みをみつめる、作家のきびしくてあたたかな目がかくされているような気がした。

生まれ故郷に近いためだったのかもしれない。この取材旅行中に、よく水上さんは、幼少時の思い出を語った。

若狭の海岸から一里ばかり山へ入った村から、九つのとき、口べらしのため京都の寺へだされた水上さんだが、雪の降る二月、縁先のつるし柿の下で、「いってくるウ」と、勉強が胸をはっていうと、お母さんが「ツトムや」と、なごりをおしまれたという話など、その「ツトムや」と、お母さんをまねた水上さんのぬれた声が、いつまでもわたしの耳にのこったのである。

暗い思い出に
もあたたかさ

それから水上さんは、京都の禅寺でのきびしい修業に泣きくらし、一八歳で寺を
とびでると全国を転転流浪するのだが、その身边にもつれあった女性の話なども、
まことに興味ぶかいものがあつた。

「あのな、重い荷物を肩にかついでるときは、満員の電車に乗りやすいんだ。人間、重荷をしょってほうがはりぎれるんや」などと、人生の苦汁にまみれた時代の暗い思い出にも、どこか肌にあふれるようなあたたかきがあるようであった。福井市の足羽川畔の風月楼で「弥陀の舞」の第一回の原稿を水上さんが書きおえた夜、わたしたちはいつまでも酒をのんで歌った。

酒席で水上さんがよくうたう歌は「枯れすすき」である。それと、もう一つ。

笛や太鼓に誘われて

山の祭りにきてみたら

帰りはいやいや里恋し

風吹きや木の葉の音ばかり

母さま恋しと泣いたれば

どうでもお泊りねんねしな

泣く泣くお瀬戸へ出てみれば

空には寒いあかね雲

雁雁 先になれ さおになれ

おむかえたのむというとくれ……

という童謡である。

水上さんは、戦争ちゅうにいちじ疎開して、故郷の村に近い山の分教場の先生をしたことがある。おそらく、なれぬ指先でオルガンをひきながら、山の子たちに一生けんめい教えた童謡だったのだらう。

「きっと、作家になるまでの水上さんの生活のなかで、その分教場時代が、みじかいけれど、いちばん澄んでいて、美しい思い出になったんでしょ」と、わたしは朝倉さんたちと話しあったものであった。そして、柱によりかかって眼をつぶり、低い声でうたう水上さんの顔をいつまでもみつめていたのであった。

松本清張氏 と信州の旅

また、松本清張氏、この文豪のデヴィュー当時、わたしはしばしば氏の取材旅行のおもをしたことをなつかしんでいる。

朝日新聞西部本社の広告部員だった松本氏は、『週刊朝日』の懸賞小説で「西郷札」が入選。一九五二（昭和二七）年「或る小倉日記伝」で芥川賞を受賞後、生活の本拠を東京にうつし、旺盛な執筆活動をはじめた。

当時、氏は、中央線吉祥寺のわたしの家から歩いていけるところの、ささやかな家に住んでおられた。

夜遅く帰ると、よく和服姿の氏が、歩きながら小説のプロットでもねっているのか、わたしがすれちがうのも気づかず、ひとすじになにかをおいともめる目をしていた。あのころ、松本氏の書く短篇小説の一作一作すべてが、問題作となった。

一九五八（昭和二三）年の初秋、わたしは松本氏と鹿島槍のとちゅうまで登ったことがある。氏が

『週刊朝日』に連作シリーズ「黒い画集」を書きはじめ、その第一回が北アルプスの山岳を舞台にした「遭難」という小説だった。氏もわたしも、山の知識はない。が、『鹿島槍研究』の労作のある吉田二郎氏という案内役をえて、新宿から「アルプス」の二等寝台車に乗った。

そのすこしまえ、新宿のホテルで雑誌社のカンヅメになっていた氏をむかえにいくと、いそいそと登山用の靴下をはきながら、少年のようにうれしそうに顔をしていたことを思いだす。

吉田氏の話をききながら、鹿島槍の西俣の出合まで歩いた。が、松本氏はあの推理力と構成員で、頭のなかではすでに頂上をきわめていた。「遭難」も、むしろ評判作となった。

松本氏と信州の湯につかり、苦渋にみちた少年時代の話や、けっしてめぐまれなかった朝日新聞社時代の話をポツンポツンともらされるのをきいた。わたしも知っている何人かの朝日社員の名まえがでて、「おや、おや」と思うようなこともあった。

「この松本のちかくに、ぼくが兵隊時代ごんべい駄兵をした軍医が開業しているはずだ」と、翌日、ごいっしょに医院をたずねあてたが、主人は不在で、看護婦たちが、数年にして流行作家にのしあがった氏のサインをもとめた。

東京で締切日に原稿をとりいくたびに、なにか氏の作品集が出版されていて、署名してくださいだったものだった。あるときは、窓から徹夜の疲れた顔をだし、「おーい、できとらんど。きみが許さんなら、ここからとびおるぞ」などと、笑ったこともあった。

わたしは、氏のおびただしというか、はば広い作品群のなかで、あのころの短編がいちばんすきだ。

「菊枕」「張込み」「啾々吟」「鬼畜」……、一九六三（昭和三八）年に講談社からでた一、〇〇〇

ページをこえる『松本清張短篇総集』は、いつもわたしの机上にある。

綾子さんの 夕べの祈り

三浦綾子さんご夫妻の取材の旅にも、よくおともした。もう何年になるだろう、『天北原野』の取材でご夫妻と北海道のはてを歩いたのは。それが『週刊朝日』に連載されているあいだは、月に一度、連絡のため、北海道旭川のお宅にうかがったものだった。

が、いま『週刊朝日』に連載中の「海嶺」の取材のため、一九七七（昭和五二）年四月、香港、マカオにいった日日のことがいちばんつかしい。

ご主人の光世氏は、まことに誠実なかで、現地のいろいろな人の話を克明にメモをとる。

疲れきってホテルにもどると、「全能の御神、きょうも永井さんのお力ぞえをえて、ぶじに……」。綾子さんの夕べの祈りが、やさしくなされるのだった。光世氏も、しずかに頭をたれている。わたしだけがおちつかず、ときどき、テーブルのビールのびんを盗みみる。「神様、はやくキューツとのまして……」。

敬けんなクリスチャンである三浦夫妻が、なにげなく語るキリストの話には、いつもひきこまれたものであった。さすが、作家の話だけに、イスラエルのいなか、ガリラヤ湖畔で、弟子たちを集めていくイエスの動きが手にとるようにわかり、それがいつのまにかわたしの胸にやきついていてた。

ある日、綾子さんは、いたずらっぽく、

『ぼくはだめだ。だめ人間だ』と、謙遜なさる永井さんのような人を、イエスは愛したんですよ。

と笑ったことがあった。

